

「問題発見・解決能力の育成を目指した教育課程の編成」

～つながる、深まる問いを生み出す学習活動の展開～

I 研究主題

(1) 研究主題の設定について

平成 29 年告示の中学校学習指導要領では、子どもたちが将来活躍する社会は、グローバル化や技術革新によりこれまで以上に急速に変化し、予測困難な時代になるとされている。このため「生きる力」をより具体化し、教育課程全体を通して育成を目指す資質・能力を明確化することや、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善が求められてきた。この動きに伴い、学校教育を通して育成を目指す資質・能力が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力等」、「学びに向かう力、人間性等」に整理され、この 3 つの資質・能力がバランスよく育まれるよう、教育課程の改善が図られてきた。また、「言語能力」、「情報活用能力」、「問題発見・解決能力」などの基盤的な資質・能力についても、教科等横断的な視点に基づき育成する方向で見直しが進められた。令和 3 年に公表された『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して』では、『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実』が、各学校における授業改善をより具体的に進めるための視点として掲げられ「主体的・対話的で深い学び」を後押しする内容となってきた。

本校では令和 4 年度から令和 6 年度にかけて、「一人一台端末環境における指導と評価の一体化」を研究主題に掲げ、その中で個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図る方法とその授業実践における評価のあり方を研究してきた。その成果として、「個別最適な学び」の側面からは、生徒一人ひとりの学習の進度や興味、困難さに応じて学習を調整するなど、学習者の主体性を尊重する学びの在り方について、各教科等を通じて研究することができた。また、「協働的な学び」の側面からは、他者と考えを交流し合うことで学びを深めていく、対話的な学びの在り方について研究することができた。こうした研究を通じて、ICT の活用を前提とした「個別最適な学び」と「協働的な学び」の在り方について一定の成果を得ることができた一方で、「個別最適な学び」が与えられた課題の消化に終始してしまうことや、「協働的な学び」が表面的な意見交換にとどまってしまうことなども指摘された。そこで学習者が自ら問いを立て、課題を見出し、それに向かって学びを進めていく姿をどのように実現していくかという点が課題となった。学びのスタート地点となる「問い」をいかに生み出し、深めていくかという観点から、「問題発見・解決能力」の育成を今後の実践における重要な課題として設定した。

今年度は、これまでの研究成果を土台に、学習者自らが「問い」をもち、それを他者と共有・発展させながら課題を追究していく学習活動の構築を目指していく。教科の本質に迫る探究的な学びや、総合的な学習の時間との連動、カリキュラム・マネジメントによる教育課程全体での資質・能力の育成を視野に入れながら、「つながる、深まる問い」を生み出すプロセスに焦点を当てた授業づくりと評価の在り方を明らかにしていきたい。

(2) 学習指導要領における「問題発見・解決能力」について

「問題発見・解決能力」は、学習の基盤となる資質・能力として学習指導要領に示されている。しかし、中学校指導要領解説 総則編「(1) 学習の基盤となる資質・能力(第1章第2の2の(1))」の中では、同じ学習の基盤となる資質・能力である「ア 言語能力」や「イ 情報活用能力」が、それらを構成する資質・能力が、(知識・技能)、(思考力・判断力・表現力等)、(学びに向かう力・人間性等)の3つの観点に沿った具体的な文言が参考として示されているのに対し、「ウ 問題発見・解決能力」は、構成する具体的な力や育成方法に関する記述が少ない。この点が、現場の実践やカリキュラム設計において課題となっている。

なお、同資料の「3 育成を目指す資質・能力(第1章第1の3)」の「(2) 思考力、判断力、表現力等を育成すること」の中に、『「思考力、判断力、表現力等」』とは、「知識及び技能」を活用して課題を解決するために必要な力と規定されており、「知識及び技能を活用して課題を解決する」過程の1つに、“物事の中から問題を見だし、その問題を定義し解決の方向性を決定し、解決方法を探して計画を立て、結果を予測しながら実行し、振り返って次の問題発見・解決に繋げていく過程¹⁾”といった問題発見・解決能力に関連した記載を見つけることができる。なお、同様の記載が、「(1) 主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善(第1章第3の1の(1))」にも示されている。

また、令和7年5月22日の中教審初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会(第8回)の中で、探究的な学びに係る具体的論点において、「学習の基盤となる資質・能力」の課題と整理の視点が示された。この整理の中でも、「問題発見・解決能力」について、“考え方は重要でも、資質・能力の具体や実践の在り方が明らかとなっていない²⁾”ことが課題として挙げられている。そして、「学習の基盤となる資質・能力」の今後の整理イメージ(案)の中では、“学習の「基盤」として示す資質・能力は2つに絞る”(言語能力、情報活用能力)ことと、「問題発見・解決能力」については“「学習の基盤となる資質能力」として示すのではなく、総合の目標や発達段階に応じた示し方を検討する中で、問題発見・解決の要素を重視するとともに、各教科等の学習の過程で問題発見・解決が重視されることを示してはどうか³⁾”とされており、次期学習指導要領における、この資質・能力の在り方が問われる段階にある。

(3) 研究の経緯

現行の学習指導要領において「学習の基盤となる資質・能力」とされている内容について、これまでも研究・実践を重ねてきた。平成20・21年改訂学習指導要領以降の期間において、これらを主題または副主題に設定した研究年度は次のとおりである。「言語活動」は平成20年度～平成22年度「新学習指導要領の趣旨を実現する教育の展開」において、また平成24年度「言語活動を通じた思考力・判断力・表現力の評価についての組織的な取組」で主に扱ってきた。「情報活用能力」は平成29年度～令和元年度「新学習指導要領の趣旨を実現する教育の展開」において扱ってきた。

また、令和4年度～令和6年度「一人一台端末環境における指導と評価の一体化」の研究実践の期間において、生徒の「学習履歴の蓄積とその利活用」や学びにおける「自己選択・自己決定」の場面を設定した学習活動についての研究実践を重ねてきた。Iの(1)でも述べたが、「個別最適な学び」の実現にあたっては、指導の個別化だけではなく、学習の個性化に関わる授業実践を重ねた。特に、“教師が子供一人一人に応じた学習活動や学習課題に取り組む機会の提供をすることで、子供自身が学習が最

適となるよう調整する⁴⁾”という観点から、生徒が自ら問題を見出し、学習を進める必要性がより一層浮き彫りになってきた。

その他、令和4年度から本校では北海道教育大学函館校と連携し、総合的な学習の時間において「地域課題解決型探究学習」を進めてきた。同学習のオリエンテーションでは、「なぜ、探究学習が必要とされているのか」という説明がなされるが、これについて“これらの問題は、既存の知識を暗記するような学習をしていても解決することはできません。明快な答えのない問題群なのです。また、なんとなく問題であることは感じているけれども、問題の本質は何なのか、どこに根本的な問題が潜んでいるのかも見えにくいいため、問いそのものを自ら見つけて、解決していかなければならないのです。⁵⁾”として生徒に説明を行い、学習に取り組んできている。

そして、「問題発見・解決能力」に焦点化した取組については、平成25年度～平成26年度の中で行われてきた部分はあるが、学校全体の取組として近年の本校では実施してきていない状態である。そこで、現在の本校や世の情勢を踏まえて、研究の対象として絞り込んでいくことにした。

Ⅱ 研究構想

(1) 研究の方向性

① 育成を目指す資質・能力と、本校の校訓及び目指す生徒像との関わり

本校が育成を目指す資質・能力として、今年度は特に「各教科等の学習を通して育まれる資質・能力」、「問題発見・解決能力」の2つに設定した。なお、各学校の教育目標と教育課程の編成について、現行の学習指導要領では“教育課程の編成に当たっては、学校教育全体や各教科等における指導を通して育成を目指す資質・能力を踏まえつつ、各学校の教育目標を明確にするとともに、教育課程の編成についての基本的な方針が家庭や地域とも共有されるよう努めるものとする。その際、第4章総合的な学習の時間の第2の1に基づき定められる目標との関連を図るものとする⁶⁾”とされている。

そのため、学校教育目標の達成のためには、各教科や道徳科、総合的な学習の時間、特別活動など、「各教科等の学習を通して育まれる資質・能力」を意識した教育活動の展開によって、学校教育目標を達成に近づくことができると考えられる。なお、「各教科等の学習を通して育まれる資質・能力」の詳細は各教科研究紀要を参考にしてもらうものとする。

同様に、教科等横断的な視点に立った資質・能力の育成についても“各学校においては、生徒の発達段階を考慮し、言語能力、情報活用能力(情報モラルを含む。)、問題発見・解決能力等の学習の基盤となる資質・能力を育成していくことができるよう、各教科等の特質を生かし、教科等横断的な視点から教育課程の編成を図るものとする⁷⁾”とされている。今年度は「問題発見・解決能力」について焦点化することから、本校の校訓及び目指す生徒像との関わりについて次項で述べる。

② 本校の校訓及び目指す生徒像と研究主題との関わり

表1は、本校の校訓と目指す生徒像をまとめたものである。令和5年度～令和6年度は、「自主」に関わる部分を焦点化した。これは令和5年度副主題「学習履歴の利活用による学び改善」と令和6年度副主題「自ら学習を調整しながら粘り強く学習に取り組む態度の育成」がそれぞれ、『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～全ての子どもたちの可能性を引き出す、個別最適な学びと、協働的な学びの

実現～』の中で示された「自立した学習者」に関連させてきたことに基づく。本校の校訓や目指す生徒像の中には「自主」、「自分自身」、「自ら」といった「自」を使用した文言が多く見られる。

今年度は、昨年度までの取組を土台に、「知 徳」に関わる部分にも焦点を当てていく。例えば、E)の「学校や郷土を愛し、より良い社会の建設に協力できる生徒～地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組み、知識を深める人～」は、「より良い社会の建設」のためには、現状の問題を発見し、そこから解決を目指すものを課題として絞り込み、実際に解決に向けて取り組むことにつながる。このE)を筆頭に、A)の「創造性」、B)の「他者とのつながり」、C)の「知性」、「真理」、「探究」、D)の「実践力」、「批判的」、「創造的」といった言葉やそこから想像される姿もまた、「問題発見・解決能力」との関わりも深いといえる。

表1 本校の校訓と目指す生徒像（※ A）～E）の付与は筆者による）

| |
|--|
| <p>北海道教育大学附属函館中学校 【校訓】</p> <p>「自主」、「明朗」、「知 徳」</p> <p>北海道教育大学附属函館中学校 【目指す生徒像】</p> <p>A) 強い意志をもち、自主的に行動し、創造性に富む生徒 —自分自身の行動とそれに伴う結果に責任をもち、自信をもって自分自身を表現する人—</p> <p>B) 他者とともに明るく、情操豊かに生きる生徒 —他者とのつながりの中で生きることが幸福にとって大切であることを理解する人—</p> <p>C) 知性を磨き、真理を愛し、自ら努力する生徒 —自ら好奇心を育み、幅広い分野の知識を探究する学ぶ熱意や喜びをもつ人—</p> <p>D) 秩序を守り、仕事に責任をもち、実践力のある生徒 —責任ある行動をとるために批判的かつ創造的に考え、理性的で倫理的に判断する人—</p> <p>E) 学校や郷土を愛し、より良い社会の建設に協力できる生徒 —地域社会やグローバル社会における重要な課題や考えに取り組み、知識を深める人—</p> |
|--|

③ 「問題発見・解決能力」を構成する資質・能力の具体化

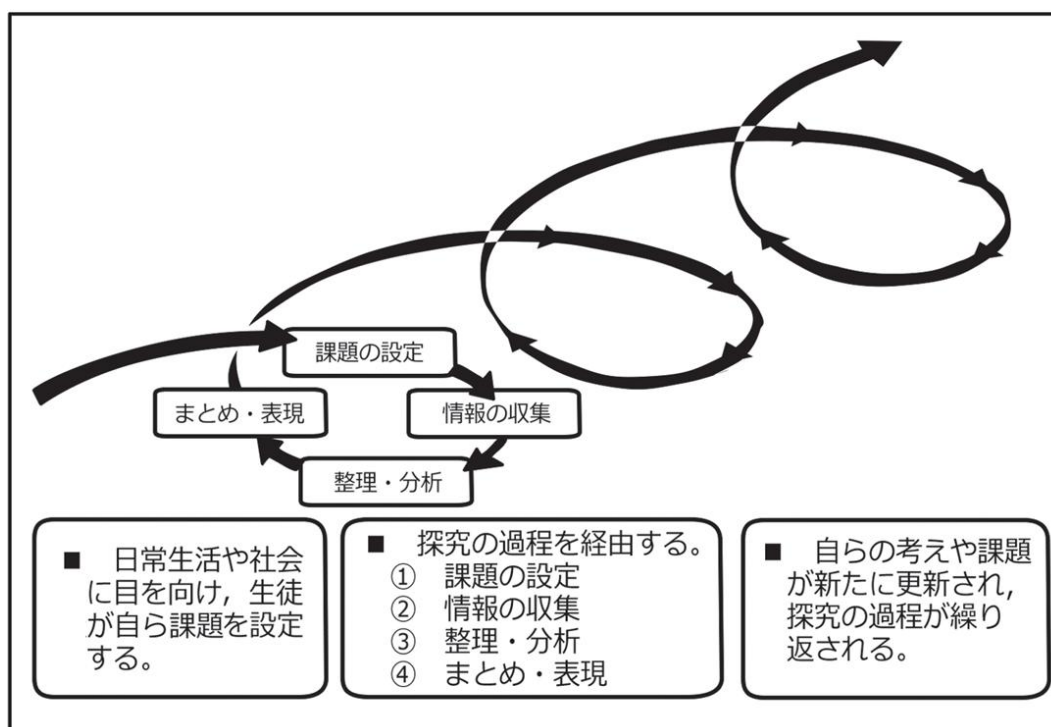
Iの(2)でも述べたとおり、「問題発見・解決能力」については、構成する具体的な力や育成方法に関する公式の記述は少ない。そこで学習指導要領等に見られる文言をもとに資質・能力を構成し、本校の研究協議会を経て表2のように設定した。なお、この資質・能力の設定にあたっては従来の「思考力・判断力・表現力等」や「探究的な学習」に関する視点を踏まえて設定した。また、文言については汎用的に用いることができる言葉を用い、教科ごとに異なる単元や題材、学習活動に応じて、生徒が「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」という探究的な学習における生徒の学習の姿に示されるプロセスの中に位置付けることができるよう構成した。(IIの(3)の②で後述する。)

表2 「問題発見・解決能力」を構成する資質・能力（250423 本校研究協議会）

| 学習の基盤となる資質・能力 | | 知識及び技能 | 思考力・判断力・表現力等 | 学びに向かう力・人間性等 |
|---------------|--------|---|---|--|
| 問題発見・解決能力 | 問題発見能力 | これまでの学びをもとに問題を発見し、課題を設定するために必要な情報を収集するための知識や技能。 | これまでの学びをもとに問題を発見する力や、解決の方向性を明確にした課題を設定する力。 | これまでの学びをもとに解決したいと思える問題を見出したり、解決の見通しをもてる課題を設定しようとする態度。 |
| | 問題解決能力 | 発見した問題や設定した課題を解決するための計画を立てたり、必要な情報の収集や整理・分析、まとめるための知識や技能。 | 発見した問題や設定した課題を解決するために、自らの予想や結果を予測を踏まえて、情報を収集、整理、分析し、解決に向けて自らの考えをまとめたり、表現したりする力。 | 自らの学習の状況を適切に評価し、それをもとに自らの学習を調整しながら、粘り強く問題や課題を解決しようとする態度。 |

図1 探究的な学習における生徒の学習の姿

（文部科学省『中学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説総合的な学習の時間編』2018年 9頁）



また、この研究実践を重ねる中で度々登場する、「問題」、「課題」、「問い」という言葉については、次のような例をもとに、各教科で定義することとした。

「問題」＝理想と現状の間に「隔たり（ギャップ）」があると認識したもの。
 「課題」＝多くの問題の中から「解決したい（目指したい）ものとして絞ったもの」。
 「問い」＝言葉の意味や事象の本質をつかむために「考えたいこと」。

授業実践においては、これらの資質・能力を視点として捉えたり、「問題」、「課題」、「問い」を見出したり、設定したりする場面が学習活動の中に組み込まれることで、問題発見・解決能力の育成に向けた授業の設計が可能となる。

(2) 研究副主題の設定

『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～すべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～』で示された「自立した学習者」は、本校でも令和5年度の研究以降、目指す姿の1つとして掲げてきた。特に昨年度の研究では、生徒自身がより良い学びを目指し、学習改善を行うために、主体的に学習に臨み、粘り強く学習に取り組むことができるよう、多様な学び方を自己選択・自己決定することができる環境を整えてきた。

今年度は、これらの環境下で学習を進めることを前提として研究活動を進めていく。「個別最適な学び」が、孤立した学びとしてただ課題を消化するのみに留まらず、主体的に学習に取り組むことができるようにすることや、「協働的な学び」が、表面的な意見交換で終わらずに深い学びへとつなげることができるようにしていくことがカギとなる。そのため生徒の学習を方向づけるための、「問題発見」の場面にこだわっていく必要性を感じた。ここでいう「問題発見」の場面とは、学習の導入における問いを生成する場面や、活動の中で違和感や疑問を言語化する場面などを想定しており、生徒の思考や関心を可視化する上でも重要な役割を担う。これらのことを踏まえて、今年度の研究の方向性を以下のように整理し、研究副主題を設定した。この副主題は、「問題発見・解決能力」の育成を核に据え、生徒の学びをより主体的に、より深く進めていくための具体的な実践の方向性を示すものである。

<研究の方向性>

生徒の「問題発見・解決能力」を高めることで、生徒の学習は「主体的・対話的で深い学び」を一層具体化して実現することができる。

○生徒が学習において自らの問いをもとに具体的な問題を発見し、課題を設定することができるようにすることで、自らの学習を調整する力を育成し、主体的に学習に取り組むことができる。

○生徒が問題の解決を図るために、各教科の見方・考え方の働かせ方を習得することで、自らの考えを広げたり深めるなどの学習に取り組むことができる。

<研究副主題>

～つながる、深まる問いを生み出す学習活動の展開～

(3) 研究の重点

実際に研究を進めるにあたって、以下の①～④を重点とし、研究に取り組む。

- ① 教科において育成を目指す資質・能力と問題発見・解決能力との関連の整理
- ② 問題発見・解決のプロセスと各教科の実践との親和性
- ③ 問題発見・解決能力の評価（形成的評価）の在り方
- ④ 問題発見・解決のプロセスが「主体的・対話的で深い学び」に与えた成果と課題

① 教科において育成を目指す資質・能力と問題発見・解決能力との関連の整理

本校では、平成29年度の研究において、本校が育成を目指す資質・能力を整理するため、資質・能力シートを作成してきた。当時は「教科において育成を目指す資質・能力（a）」と「情報活用能力（b）」、「市民として求められる資質・能力（c）」を組み合わせる形でシート化した。（図2）今年度はその内容をベースに、「教科において育成を目指す資質・能力（a）」とその単元・題材において特に重点化して育成を図ることができる「問題発見・解決能力（p）」を位置付けて一覧で示していくこととした。（図3）

図2 平成29年度 資質・能力シート

| 資質・能力シート (ver.2) | | | | | |
|------------------|--|----------------------------------|--|----|-----|
| 北海道教育大学附属函館中学校 | | | | | |
| 教科名 | 社会(地理) | 学年 | 1 | 時期 | 5～6 |
| 単元・題材名 | 世界の様々な地域（世界各地の人々の生活と環境） | | | | |
| この単元・題材の役割 | | | | | |
| | 各教科において育成を目指す 資質・能力 | 情報活用能力 | 市民として求められる 資質・能力 | | |
| 知識・技能 | ・世界のさまざまな地域における、気候や環境、生活の多様性の理解 ・地図や写真、グラフなどのさまざまな資料から、情報を効果的に調べたり、読み取ったり、まとめたりする技能 | | ・地図や写真、グラフなどのさまざまな資料から、情報を効果的に調べたり、まとめたりする技能 | | |
| 思考力・判断力・表現力等 | ・自分の伝えたいことが明らかになるように、内容を考え、自分の考えを論理立てて説明したり、他者と議論したりする力 | ・さまざまな出来事や状況について、集めた情報と結び付けて考える力 | | | |
| 学びに向かう力・人間性等 | ・世界各地のさまざまな異なる生活や文化などを大切にしようとする気持ち | | | | |

図3 令和7年度 資質・能力シート

| 資質・能力シート(p) | | | | | |
|--------------|-----------------------------|---|-------------|----|-----|
| 教科名 | 社会科 | 学年 | 第2学年 | 時期 | 11月 |
| 単元・題材名 | 私たちと政治（人権の尊重と日本国憲法の基本原則） | | | | |
| この単元・題材の役割 | | | | | |
| | 教科において育成を目指す 資質・能力(a) | この単元・題材において特に育成を図る 問題発見・解決能力(p) | | | |
| 知識及び技能 | 指図書コード 83232333111000000 | (ア) 人間の尊厳についての考え方を、基本的人権を中心に、法の意義を理解すること。 | 問題発見能力(p-d) | | ○ |
| | 指図書コード 83232333121000000 | (イ) 民主的な社会生活を営むためには、法に基づき政治が大切であることを理解すること。 | 問題解決能力(p-e) | | |
| | | | 備考 | | |
| 思考力・判断力・表現力等 | 指図書コード 83232333121000000 | (ア) 我が国の政治が日本国憲法に基づいて行われていること、この意義について多面的・多角的に考察し、表現すること。 | 問題発見能力(p-d) | | ○ |
| | 指図書コード | | 問題解決能力(p-e) | | |
| | | | 備考 | | |
| 学びに向かう力・人間性等 | 指図書コード 83232323000000000 | (ウ) 現代の社会的事象について、現代社会に見られる課題の解決を視野に主体的に社会に関わりとする態度を養うとともに、多面的・多角的な考察や深い理解を通して「誰か人」を養われる。国民主権を担う公民として、自國を愛し、その平和と繁栄を図ることや、各国が相互に主権を尊重し、各国民が協 | 問題発見能力(p-d) | | ○ |
| | 指図書コード | | 問題解決能力(p-e) | | |
| | | | 備考 | | |

② 問題発見・解決のプロセスと各教科の実践との親和性

「問題発見・解決能力の育成を目指した教育課程の編成～つながる、深まる問いを生み出す学習活動の展開～」を推し進めていくにあたり、問題発見・解決を図るための授業のプロセスを整理した。基本的な流れについては、「課題の設定」、「情報の収集」、「整理・分析」、「まとめ・表現」という探究的な学習における生徒の学習の姿に示されるプロセスをもとにして、具体的な資質・能力の育成を視野に図式化した。（図4）

また、このプロセスをもとにして生徒が活動していくためには、生徒が見出ししたり、生徒から生じた「問い」の存在が大きく関わる。そこで、「問い」について、資質・能力の3つの柱を踏まえて3つに整理した。（図5）

図4 問題発見・解決能力の育成に関わるプロセス (案)

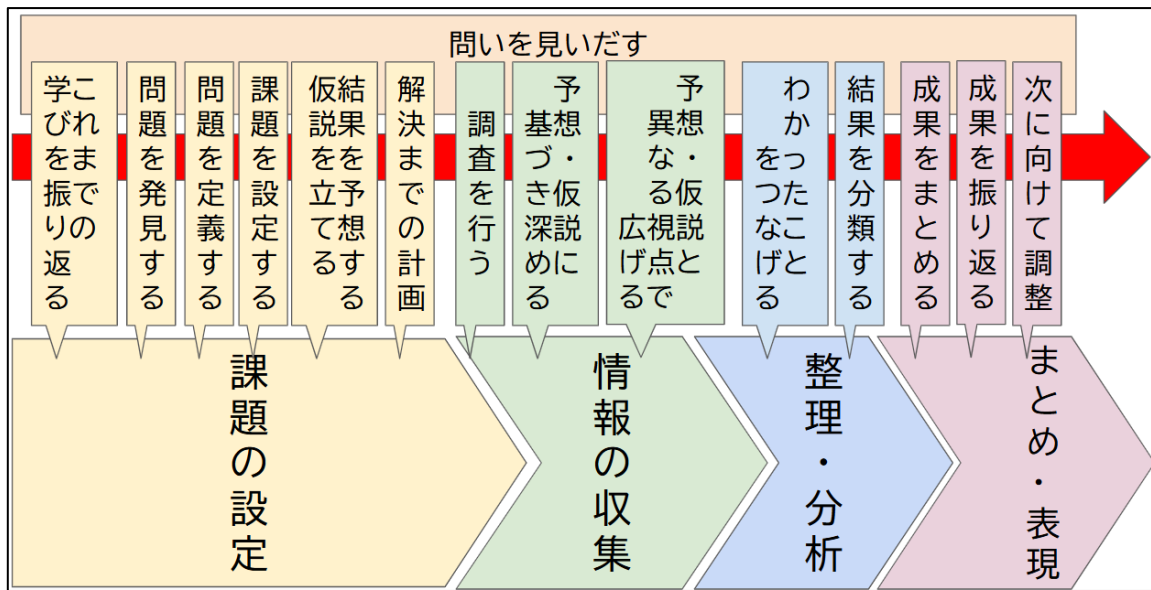
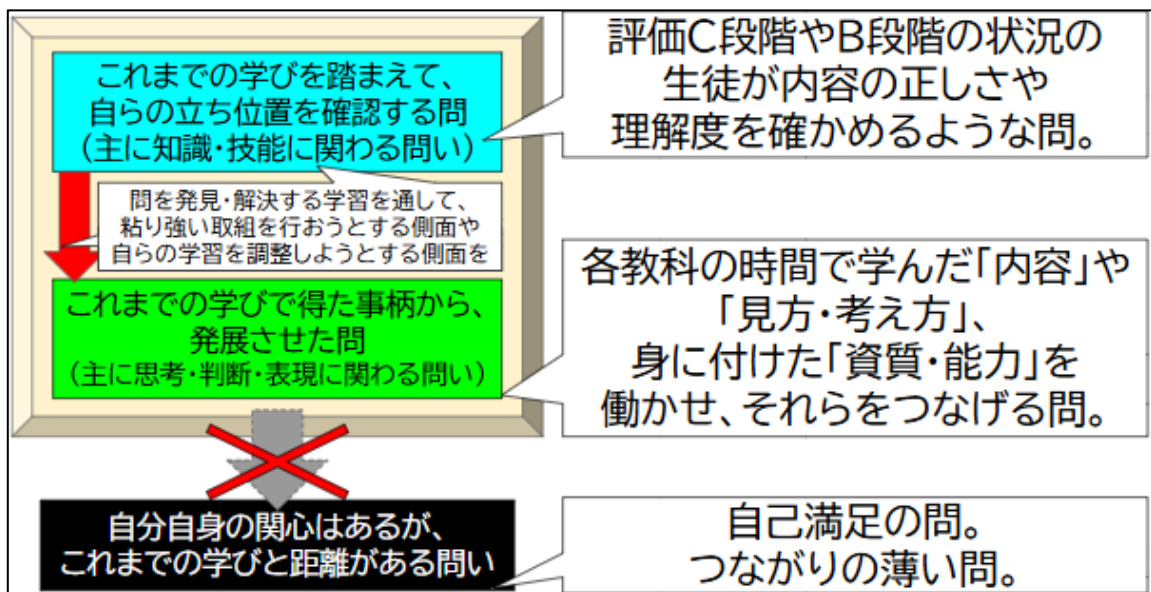


図5 問の種類と資質・能力の3つの柱との関係



- i) これまでの学びを踏まえて、自らの立ち位置を確認する問い。
- ii) これまでの学びで得た事柄から、発展させた問い。
- iii) 自分自身の関心はあるが、これまでの学びと距離がある問い。

i) は例えば、「織田信長が行った楽市・楽座とはどのような政策か」や「二酸化炭素はどのような性質をもつのか」のような問いである。この場合、知識そのものに関わる内容や正しい知識を得たり、その内容が正しいかどうかを確認することになるため、知識・技能に関わる問いとなる。

ii) は例えば、「先ほどの計算式は、条件を三角形から四角形に変えても用いることができるのか」

のような問いである。この場合、i) で生じた問いとその答えを組み合わせ、新たな問いとなるものや、教科の見方・考え方をもとにして立てられた問いとなるため、思考・判断・表現に関わる問いとなる。なお、見方・考え方については、表3に整理した。

一方でiii) は例えば、「モーツァルトの生年月日はいつか」や「徳川家康の好きな食べ物は」のような問いである。この場合、生徒の興味や関心としては高い問いではあるが、学びの内容との開きが大きくなっている。そのためiii) はそのまま学習の中で問いとして用いるには少々つながりが薄くなってしまふ。

そして、これらi) やii) の問いを見出したり、解決を見据えて新たな問いを立てていこうとすると、生徒の学習を調整しようとする側面や粘り強い取組を行おうとする側面を見取ることができると考えている。これらの問いは主体的に学習に取り組む態度にも、関連させることができると考えている。

表3 各教科の見方・考え方（筆者作成）

| 教科 | 見方・考え方 | 着目点 | 内容 |
|-----------|---------------------------|---------------------------------------|---|
| 国語 | 言葉による見方・考え方 | 言葉の意味、働き、使い方等 | 対象と言葉、言葉と言葉との関係を捉えたり、問い直す。 |
| 社会 | 地理的な見方・考え方 | 位置や空間的な広がり | 地域の環境条件や地域間の結び付きの枠組みの中で、人間の営みと関連付ける。 |
| | 歴史的な見方・考え方 | 時期、推移 | 類似、差異を明確に、因果関係などで関連付ける。 |
| | 公的な見方・考え方 | 政治、法、経済 | より良い社会の構築に向けて課題解決のための選択・判断に資する概念や理論などと関連付ける。 |
| 数学 | 数学的な見方・考え方 | 数量や図形及びそれらの関係など | 論理的、統合的・発展的に考える。 |
| 理科 | 理科の見方・考え方 | 量的・関係的、質的・実体的、共通性・多様性、時間的・空間的など | 比較・関連付け・条件制御、多面的に考える。 |
| 英語 | 外国語によるコミュニケーションにおける見方・考え方 | 社会や世界、他者との関わり | コミュニケーションを行う目的や場面、状況等に応じて情報を整理しながら考えなどを形成し、再構成する。 |
| 音楽 | 音楽的な見方・考え方 | 音楽を形作っている要素とその働き | 音楽に対する感性を働かせ、自己のイメージや感情、生活や文化などと関連付ける。 |
| 保健 体育 | 体育の見方・考え方 | 運動やスポーツの価値や特性 | 楽しさや喜びとともに体力の向上に果たす役割の視点からとらえ、自己の適性等に応じた「する・みる・支える・知る」の多様な関わり方と関連付ける。 |
| | 保健の見方・考え方 | 健康や安全に関する原則や概念 | 個人及び社会生活における課題や情報を、疾病等のリスクの軽減や生活の質の向上、健康を支える環境づくりと関連付ける。 |
| 美術 | 造形的な見方・考え方 | 形や色彩、材料や光などの造形の要素 | よさや美しさなどの価値や心情などを感じ取る力である感性や、想像力を働かせ、自分としての意味や価値をつくりだす。 |
| 技術・ 家庭 | 技術の見方・考え方 | 社会からの要求、安全性、環境負荷や経済性など | 技術を最適化すること。 |
| | 生活の営みに係る見方・考え方 | 協力・協働、健康・快適・安全、生活文化の継承・創造、持続可能な社会の構築等 | 生涯にわたって、自立し、共に生きる生活を想像できるよう、より良い生活を営むために工夫する。 |

その他、各プロセスにおける細かな内容は、問題解決学習や自己調整学習等に示される内容を元にして設定した。(表4)

なお、各教科の授業実践においては、これらの流れを踏まえつつ、教科の実態に合う形に修正したりする中で、その親和性について検討していくことを想定している。

表4 問題発見・解決のプロセスの詳細

| プロセス | | 内容 |
|----------------|---------------------|---|
| 大 | 小 | |
| 課題 の 設定 | これまでの学びを振り返る | これから学習に取り組む内容に関わる、これまでの学びや経験、考えなどを振り返る |
| | 問題を発見する | 学習に関わる事象について、自らの経験やこれまでの学習等との隔たり（ギャップ）のある点を見いだす。 |
| | 問題を定義する | どのようなことが問題であるかを明確にする。 |
| | 課題を設定する | 問題の中から、解決を図る事柄を明確にする。 |
| | 結果を予想する 仮説を立てる | 情報の収集や整理・分析の場面を視野に、予想・仮説を立てる。 |
| | 解決までの計画 | 発見した問題や設定した課題に対する予想や仮説、与えられた時間や教科の目標を踏まえて、今後の活動の見通しをもつ。 |
| 情報 の 収集 | 調査を行う | 読む、見る、聞く、話し合うなど、計画をもとに行動する。 |
| | 予想・仮説に基づき深める | 発見した問題や設定した課題を解決するために、学び得た事柄を具体的ににする。 |
| | 予想・仮説を異なる視点で 広げる | 発見した問題や設定した課題を解決するために、学び得た事柄を異なる視点で考えたり、別の可能性の有無を探る。 |
| 整理 ・ 分析 | わかったことをつなげる | 学び得た事柄同士を関連させたり、発見した問題や設定した課題などと関連付ける。 |
| | 結果を分類する | まとめを視野に、学び得た事柄を、分類する。 |
| まとめ ・ 表現 | 成果をまとめる | 学び得た事柄を、目的に沿ってまとめる。 |
| | 成果を振り返る | 学び得た事柄から得た成果や課題を見出す。 |
| | 次につなげる | 学び得た事柄から生じたさらなる問いや今後の学習とのつながりを見出す。 |

③ 問題発見・解決能力の評価（形成的評価）の在り方

「問題発見・解決能力」を構成する資質・能力については、Ⅱの（１）の③にて述べたとおりである。この資質・能力は、各教科の学習の文脈の中で育むものであるため、この資質・能力そのものが身に付いたかどうかについて、総括的評価を行うことは適切でないと考えられる。しかし、実際の各教科の学習の過程の中で、先に示した資質・能力に基づく形成的評価と生徒へのフィードバックを行うことは必要である。そのため、授業実践にあたっては、実際の単元の中に「問題発見・解決能力」を落とし込んだ場合、具体的にどのような場面でどのような形で育成することができるかイメージを具体化しておく必要がある。

そのため、公開授業等で使用する指導計画においては資料1のような形で、「問題発見・解決能力」について位置付けることとした。本校国語科の資料においては、実際の授業の場面をイメージした記載が行われている。例えば、問題発見能力に関しては、1時間目の中に発見の場を位置付けたことや、課題設定を行うまでの中で確認していく事柄を記載している。また、問題解決能力に関しては、3時間目

以降の時間の中での取り組みの内容や、問題解決のための他地域を確認するための手段、計画の修正が起りえた場合の動きなどを記載している。

この記載が、実際に単元・題材の学習を進めていくにあたって、問題発見・解決能力を育成していくにあたっての具体的な形成的評価を行うポイントとなる。各教科の実践にあたって、より良く育成を図るための方法をどのように落とし込んでいけるかを検証していく。

資料1 指導計画における問題発見・解決能力の位置付け（国語科 校内研の指導計画より抜粋）

| 本校における、問題発見能力の定義 | | | |
|--|---|---|--|
| | 知識及び技能 | 思考力、判断力、表現力等 | 学びに向かう力、人間性等 |
| 問題発見能力 | これまでの学びをもとに問題を発見し、課題を設定するために必要な情報を収集する。 | これまでの学びをもとに問題を発見する力や、解決の方向性を明確にした課題を設定する。 | これまでの学びをもとに解決したいと思える問題を見出したり、解決の見通しをもてる課題を設定しようとする。 |
| 本単元における、問題発見能力の位置付け | | | |
| 本単元では1時間目に問題発見の場を位置づけた。生徒自身が現在までの「教科の学び」「生活経験」を振り返ることで、自身の学習の状況を確認する。感謝の思いを伝える礼状を書くために、敬語の働きや礼状の構成などを整えるという、国語科の資質・能力の部分においての問題を明確にさせ、個々の課題を設定させていく。 | | | |
| 本校における、問題解決能力の定義 | | | |
| | 知識及び技能 | 思考力、判断力、表現力等 | 学びに向かう力、人間性等 |
| 問題解決能力 | 発見した問題や設定した課題を解決するための計画を立てたり、必要な情報の収集や整理・分析、まとめる。 | 発見した問題や、設定した課題を解決するために、自らの予想や結果の予測を踏まえて、情報を収集、整理、分析し、解決に向けて自らの考えをまとめたり、表現したりする。 | 自らの学習の状況を適切に評価し、それをもとに自らの学習を調整しながら、粘り強く問題や課題を解決しようとする。 |
| 本単元における、問題解決能力の位置付け | | | |
| 本単元では3～5時間目の3時間を、生徒個々の問題を解決するための時間と設定し、自身の学習計画に基づき学習を進めていく。敬語 CBT や礼状 CBT に取り組む機会を設けることで、生徒個々が基礎・基本となる知識を身に付けることができているかを確認し、補充的な学習や発展的な学習に取り組む。教科書やインターネットの情報、更には仲間と学び合いながら、主体的に学習を進めていき、問題の解決に向けて取り組むのである。 また、学習計画を適宜確認させ、必要に応じては修正を可としている。当初の学習計画と自身の学習の状況に隔たりがある場合には、学習手段を変更したりする必要もある。自己調整をさせながら、本単元3～5時間目を進めていく。 | | | |

④ 問題発見・解決のプロセスが「主体的・対話的で深い学び」に与えた成果と課題

「問題発見・解決能力」は、あくまでも「学習の基盤となる資質・能力」の1つであり、最終的な目的はあくまでも教科の学習が「主体的・対話的で深い学び」につながっているかという点が重要である。そのため、問題発見・解決能力の育成をめざし、そのプロセスを取り入れた単元・題材による実践

の積み重ねが与えた影響について検証を行う。

とくに、“学校教育法第30条第2項において、「思考力、判断力、表現力等」とは、「知識及び技能」を活用して課題を解決するために必要な力と規定されている⁸⁾”とあるように、各教科の思考力、判断力、表現力等の資質・能力にどれだけ迫ることができたかを見取ることが求められる。各種のパフォーマンス課題をはじめとした、適切な評価方法と合わせて検証していく。

(4) 各教科が設定する教科研究主題（令和7年度）

本研究ではここまで示した取組をもとにして、具体的な研究推進は各教科担当が中心となって取り組む。各教科が研究の方向性や明らかにする事柄として設定した教科研究主題は、以下の表5のとおりとなる。なお、具体的な教科実践については、各教科研究紀要をご覧ください。

表5 令和7年度 教科研究主題一覧

| 教科名 | 教科研究主題 |
|-----------|--|
| 国語 | 問題発見・解決能力の育成を目指した教育課程の編成 ～対話と振り返りを通して問いを生み出す学習活動の展開～ |
| 社会 | 公民としての資質・能力の基礎の育成を目指して ～問いを起点に社会的事象を探究し、思考力、判断力、表現力等の育成を目指した実践～ |
| 数学 | 数学科におけるICTを活用した「問題発見・解決能力」の育成 ～AIを「問い」の生成と深化のパートナーとする学習活動のデザイン～ |
| 理科 | 問題発見・解決能力の育成を目指した教育課程の編成 ～問いを生み出し、解決へと導く理科授業デザイン～ |
| 美術 | 問題発見・解決能力の育成を目指した教育課程の編成 ～課題や対象と向き合うことを通して問いを生み出す学習活動の展開～ |
| 保健体育 | つながる、深まる問いを生み出す学習活動の展開 ～保健体育科における問題発見・解決能力の育成を目指して～ |
| 家庭 | 家庭分野における問題発見・解決能力の育成 ～自分事として事象を捉える学習活動の工夫～ |
| 外国語 | 問題発見・解決能力の育成を目指した英語の授業づくり ～生徒自らが問いを発見する英語授業のデザイン～ |
| 総合的な学習の時間 | 総合的な学習の時間における『問題発見・解決能力』の育成 ～生徒が自ら「問い」を発見し、社会とつながる探究学習と教育課程の編成～ |

Ⅲ 本年度の研究実践

(1) 具体的な実践（学校生活全般に関わる取り組み）について

① SR (Self-Regulation) フォーム

本校では令和5年度研究から、SR (Self-Regulation) フォーム（以下、SR フォームとする）を実施してきた。SR フォームは自分の行動を「振り返り」、次の自分の行動に「見通し」をもつためのものである。内容は生活全般と学習全般に対する「振り返り」を行い、次の期間までの「見通し」を立てることを目的としている。これらは生徒に「自己省察」させることを目的としたものであり、自分自身を見つめ考える力を育成することにつなげていくものである。

令和7年度に実施しているSR フォームの具体的な内容は、表6のとおりである。なお、SR フォームの内容は令和5年度以降マイナーチェンジを経て、今年度の実施となっており、内容の比較については表7のとおりである。

振り返り項目は、今年度からは「学習面」、「生活面」、「諸活動・その他」とした。今年度はSR フォームで行う振り返りと見通しについて、生徒個人が年度初めに設定する個人目標に沿って行うことができるようにするためである。そのため、本校の第1学年～第3学年それぞれの学年が準備した個人目標シートの項目を踏まえて変更している。

活動時間は、昨年度までは登校してから朝の会の時間までとしていた。しかし、実態を見るとこの時間内でのSR フォームの実施状況が、生徒や学級によって異なる結果が生じた。そのため、今年度は生徒が時間的余裕をもって、確実に取り組むことができるよう、第2金曜日は朝の会時間を延長し、15分間の時間を設定することとした。活動時間の確保に伴って、振り返り項目については、記述を増やすことができた。そのため、生徒自身の良く取り組めたこと、努力が必要だったことについて、選択式以上に具体的な内容で振り返ることが可能となる。

記述内容が具体的になる分、「見通し」、「実行」、「振り返り」のサイクルの間隔を1か月（または2週間）に伸ばすことにした。毎週の習慣というものはやや薄れるが、個人目標との兼ね合いと、中長期的なサイクルの中での成果を見直すことができると考えている。

表6 令和7年度版SR フォームの内容

| |
|---|
| <p><振り返り></p> <p>【1-1】 前回実施～今回までの期間に、頑張れた・達成できたと思う事柄。（個人目標項目の選択）</p> <p>【1-2】 どの場面でどのように取り組んだかがわかるように振り返る。（記述）</p> <p>【1-3】 前回実施～今回までの期間に、努力が必要だったと思う事柄。（個人目標項目の選択）</p> <p>【1-4】 どの場面でどのように取り組んだかがわかるように振り返る。（記述）</p> <p><見通し></p> <p>【2-1】 明日から次回の振り返りまでの期間に、特に力を入れたい事柄。（個人目標項目の選択）</p> <p>【2-2】 明日から次回の振り返りまでの期間に力を入れて実行したい具体的な内容。（箇条書き）</p> <p>【2-3】 今週の振り返りを踏まえた、自分の個人目標の内容を調整する必要性の確認。（選択）</p> |
|---|

表7 令和5年度～令和7年度SRフォームの内容比較

| | 令和5年度 | 令和6年度 | 令和7年度 |
|------------|---|--|---|
| 振り返り項目 | <選択式> ○基本的な生活 ○授業 ○家庭学習 ○係活動・委員会活動 ○部活動・習い事 | <選択式> ○基本的な生活 ○授業 ○家庭学習 ○係活動・委員会活動 ○部活動・習い事 | <選択式> ○学習面 ○生活面 ○諸活動・その他 |
| 力を入れた項目 | <選択式> ○国語 ○社会 ○数学 ○理科 ○美術 ○音楽 ○保体 ○技術 ○家庭科○英語 ○総合的な学習の時間 ○道徳 ○学級活動 | <選択式>※最大3つ ○国語 ○社会 ○数学 ○理科 ○美術 ○音楽 ○保体 ○技術 ○家庭科○英語 ○総合的な学習の時間 ○道徳 ○学級活動 | <記述式> 【例1：○○の教科で……に取り組めた。】 【例2：学級の◇◇に対して……のように頑張った。】 |
| 努力が必要だった項目 | <選択式> ○国語 ○社会 ○数学 ○理科 ○美術 ○音楽 ○保体 ○技術 ○家庭科○英語 ○総合的な学習の時間 ○道徳 ○学級活動 | <選択式>※最大3つ ○国語 ○社会 ○数学 ○理科 ○美術 ○音楽 ○保体 ○技術 ○家庭科○英語 ○総合的な学習の時間 ○道徳 ○学級活動 | <記述式> 【例1：○○の教科では……といった取り組み方だった。】 【例2：学級の◇◇で……がうまくいかなかった。】など。 |
| 見通し項目 | <記述式> ○箇条書きで記載 | <記述式> ○箇条書きで記載 | <記述式> ○箇条書きで記載 |
| 入力頻度 | 毎週末朝 | 毎週末朝 | 毎月第2金曜朝 |
| 活動時間 | 登校～朝の会まで | 登校～朝の会まで | 朝の会時間を延長 |
| 蓄積方法 | GoogleKeep | 学習履歴サイト | 学習履歴サイト |

表8は実際の生徒の個人目標とSRフォームの記載内容である。この生徒は、生活面の目標に「準備」、学習面の目標に「習慣」、「期限」、その他の目標に「コミュニケーション」を年度当初に掲げた。2カ月のSRフォームを通して、各目標に沿って力を入れたい事柄を設定し、実際に振り返りが行われている。また振り返り結果に基づき、6月には個人目標の修正を行っている。これらはSRフォームに回答した結果なども反映している部分が見られており、中長期的な目標とそのための具体策を考えて、実行しようとしている様子が見える。

表8 生徒の個人目標とSRフォームの記載

| (1) 年度初め設定の個人目標 | (2) 5月2週目のSRフォーム内容 | | | | | | |
|---|--|--|---|--|--|--|---|
| <div style="text-align: center;">個人目標</div> <p>3年 組 番氏名</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="background-color: #c8e6c9; text-align: center; vertical-align: middle;">生活面</td> <td> <input type="checkbox"/> 忘れ物をしないように次の日の準備を前日に終わらせておく <input type="checkbox"/> 毎日小さな目標を立てて生活する </td> </tr> <tr> <td style="background-color: #c8e6c9; text-align: center; vertical-align: middle;">学習面</td> <td> <input type="checkbox"/> 定期的に学校ワークを取り組んで予習復習の習慣をつける <input type="checkbox"/> 提出期限がある課題は提出期限の前日には終わっているようにする </td> </tr> <tr> <td style="background-color: #c8e6c9; text-align: center; vertical-align: middle;">その他</td> <td> <input type="checkbox"/> 部活では他学年の人とコミュニケーションをとることを意識する </td> </tr> </table> | 生活面 | <input type="checkbox"/> 忘れ物をしないように次の日の準備を前日に終わらせておく <input type="checkbox"/> 毎日小さな目標を立てて生活する | 学習面 | <input type="checkbox"/> 定期的に学校ワークを取り組んで予習復習の習慣をつける <input type="checkbox"/> 提出期限がある課題は提出期限の前日には終わっているようにする | その他 | <input type="checkbox"/> 部活では他学年の人とコミュニケーションをとることを意識する | <p>【1-1】学習面</p> <p>【1-2】英語の教科で自主的にワークに取り組むことができた。また、分からないところは調べ、ノートにまとめることができた。</p> <p>【1-3】生活面</p> <p>【1-4】時間を見て行動する意識が足りなかった。朝の時間や5分休憩の時間など授業がはじまるギリギリでも話していて、準備ができていないことが度々あったため改善が必要だと思った。</p> <p>【2-1】学習面, 生活面</p> <p>【2-2】・一週間に一回は自主的にワークに取り組む。(特に数学)・早寝早起きを心がけ夜12時までには寝ているようにする。・提出期限のある課題は期限の前日には終わらせているようにする。</p> <p>【2-3】今のところ、内容は変えずに取り組む。</p> |
| 生活面 | <input type="checkbox"/> 忘れ物をしないように次の日の準備を前日に終わらせておく <input type="checkbox"/> 毎日小さな目標を立てて生活する | | | | | | |
| 学習面 | <input type="checkbox"/> 定期的に学校ワークを取り組んで予習復習の習慣をつける <input type="checkbox"/> 提出期限がある課題は提出期限の前日には終わっているようにする | | | | | | |
| その他 | <input type="checkbox"/> 部活では他学年の人とコミュニケーションをとることを意識する | | | | | | |
| (3) 6月2週目のSRフォーム内容 | (4) 6月調整後の個人目標 | | | | | | |
| <p>【1-1】生活面, 諸活動・その他</p> <p>【1-2】規則正しい生活を心がけるため夜の11時には布団に入る習慣をつけることができた。また、学級の掲示物作成に対して、放課後に自主的に残り作業を進めクラスのために努力した。</p> <p>【1-3】学習面</p> <p>【1-4】定期テスト対策で五教科のワークを一周するのが遅くなってしまった。それにより当日ギリギリまで勉強に追い込まれて良い結果を残すことができなかった。</p> <p>【2-1】学習面, 諸活動・その他</p> <p>【2-2】・苦手教科の理数のワークを自主的に進めて予習復習をする習慣を付ける。・わからないことはその場で聞き後回しにしない。・梧桐祭合唱練習も入ってくるため、一時間一時間を大事に全力で練習に取り組む。・提出期限がある課題は前日には終わらせているようにする。</p> <p>【2-3】個人目標の内容の調整が必要である。</p> | <div style="text-align: center;">個人目標</div> <p>3年 組 番氏名</p> <table border="1" style="width: 100%;"> <tr> <td style="background-color: #c8e6c9; text-align: center; vertical-align: middle;">生活面</td> <td> <input checked="" type="checkbox"/> 忘れ物をしないように次の日の準備を前日に終わらせておく <input type="checkbox"/> 毎日小さな目標を立てて生活する <input style="color: red;" type="checkbox"/> 生活習慣を整えるためになるべく平日も休日も同じ時間に寝て同じ時間に起きるようにする </td> </tr> <tr> <td style="background-color: #c8e6c9; text-align: center; vertical-align: middle;">学習面</td> <td> <input type="checkbox"/> 定期的に学校ワークを取り組んで予習復習の習慣をつける <input type="checkbox"/> 提出期限がある課題は提出期限の前日には終わっているようにする </td> </tr> <tr> <td style="background-color: #c8e6c9; text-align: center; vertical-align: middle;">その他</td> <td> <input type="checkbox"/> 部活では他学年の人とコミュニケーションをとることを意識する <input style="color: red;" type="checkbox"/> 梧桐祭に向けてFJHコレクション作成は他学年に支持を出したりして引っ張ったり、協力して行う </td> </tr> </table> | 生活面 | <input checked="" type="checkbox"/> 忘れ物をしないように次の日の準備を前日に終わらせておく <input type="checkbox"/> 毎日小さな目標を立てて生活する <input style="color: red;" type="checkbox"/> 生活習慣を整えるためになるべく平日も休日も同じ時間に寝て同じ時間に起きるようにする | 学習面 | <input type="checkbox"/> 定期的に学校ワークを取り組んで予習復習の習慣をつける <input type="checkbox"/> 提出期限がある課題は提出期限の前日には終わっているようにする | その他 | <input type="checkbox"/> 部活では他学年の人とコミュニケーションをとることを意識する <input style="color: red;" type="checkbox"/> 梧桐祭に向けてFJHコレクション作成は他学年に支持を出したりして引っ張ったり、協力して行う |
| 生活面 | <input checked="" type="checkbox"/> 忘れ物をしないように次の日の準備を前日に終わらせておく <input type="checkbox"/> 毎日小さな目標を立てて生活する <input style="color: red;" type="checkbox"/> 生活習慣を整えるためになるべく平日も休日も同じ時間に寝て同じ時間に起きるようにする | | | | | | |
| 学習面 | <input type="checkbox"/> 定期的に学校ワークを取り組んで予習復習の習慣をつける <input type="checkbox"/> 提出期限がある課題は提出期限の前日には終わっているようにする | | | | | | |
| その他 | <input type="checkbox"/> 部活では他学年の人とコミュニケーションをとることを意識する <input style="color: red;" type="checkbox"/> 梧桐祭に向けてFJHコレクション作成は他学年に支持を出したりして引っ張ったり、協力して行う | | | | | | |

② DSST（デジタルソーシャルスキルトレーニング）

問題発見・解決能力を育成するための学習を実際に進めていく活動を行う中では、実際に見出した問題とその解決の方法を考えていく過程の中で「自ら学習を調整する力」が必要となっていく。そこで令和5年度に続いて、「自らを見つめる力」、「自らを制御する力」を育む目的から、DSST（デジタルソーシャルスキルトレーニング）の実施を継続している。このDSSTの実施にあたっては毎月末の金曜日の朝の会の時間を延長して行っている。

ソーシャルスキルとは“自分の感情に気付いて、その感情と上手につき合ったり、他者と適切なコミュニケーションを取ったりする力を育成するための方法⁹⁾”と言われるように、トレーニングの中には自らの特性を知るなどの自らを見つめる力に関わる事柄や、感情のコントロールを学ぶなどの自らを制御する力に関わる事柄があることから、今年度も継続して実施することとしている。実際に生徒に取り組ませる内容とその期間はこれまでと同様に、長期休業で期間を分けた前期・中期・後期の3つとし、それぞれにテーマを決めて実施する。今年度で3年目の取組であり、これまでに取り組んだDSSTの内容および今年度取り組む予定の内容は表9に整理したとおりである。

実施方法については、Google スライドや Google スプレッドシート等のデジタルの形態で実施し、実施後の成果は学習履歴サイト（後述）に蓄積することで、年間を通して、いつでも振り返りができるようにしている。

表9 DSST 実施計画の変遷

| 時期 | | テーマ | 令和5年度 取組 | 令和6年度 取組 | 令和7年度 取組 (予定) |
|----|-----|-----------|--|---|---|
| 前期 | 4月 | 自分を知る | <ul style="list-style-type: none"> ・自分チェック ・時間の管理 休日編 ・気持ちのコントロール ・Google カレンダーで記録を残そう | <ul style="list-style-type: none"> ・時間の管理 平日編 ・ストレスマネジメント ・「得意」、「苦手」を知る | <ul style="list-style-type: none"> ・自分らしさについて考える ・あなたの緊張のもと ・時間の管理 長期休暇編 |
| | 7月 | | | | |
| 中期 | 8月 | 学校生活の中の自分 | <ul style="list-style-type: none"> ・周りから見た自分 ・親しき中にも礼儀あり ・みんなの悩み やる気編 | <ul style="list-style-type: none"> ・持ち物管理術 ・良い話し合いは良い話し合いを生む ・親しき中にも礼儀あり | <ul style="list-style-type: none"> ・気持ちの良いあいさつ ・他者を尊重する ・感謝の伝え方 ・文字のコミュニケーション |
| | 12月 | | | | |
| 後期 | 1月 | 社会生活の中の自分 | <ul style="list-style-type: none"> ・自分チェック (比較) | <ul style="list-style-type: none"> ・やめられないをやめる ・自分チェック (前年度比較) | <ul style="list-style-type: none"> ・日常生活術 ・自分チェック (前年度比較) |
| | 3月 | | | | |

③ 学習履歴サイト

学習履歴サイト（Google サイト）の活用も前年度に引き続き実施している。学習履歴サイトに蓄積する内容は、SR フォームの実施結果（箇条書き部分）、DSST の結果、学校生活の記録（個人目標等）、総合的学習の時間の成果物等としている。これは、従来学級や学校で取り組んできた多くの課題が所属学級・学年や全校生徒所属の Google Classroom 等から課題されてきたものが、生徒の目線から考えると、複数の Classroom の中に取組の成果が散らばることを防ぎ、各活動や年間を通しての振り返りを行いやすくすることを目的としている。

（２） 具体的な実践（総合的な学習の時間）との関わり

詳細については、教科紀要（総合的な学習の時間）において掲載するが、本校の総合的な学習の時間・探究（以下、探究とする）では、平成 29 年度入学生より、個人設定課題の探究成果を卒業論文という形でまとめる活動を行ってきた。1 年次には探究のための基礎的・基本的なスキルの習得や、設定されたテーマに基づく課題をグループごとに設定し、函館市内及び宿泊研修先の札幌市などでのインタビュー調査活動を実施するなどし、そこから考察した成果を発表するという形である（グループ探究活動 A）。2 年次前半期には、前年度とは異なるグループを編成し、異なる課題を設定したうえで、函館市内におけるインタビュー活動や街頭アンケート活動などを経て、その成果を発表する活動（グループ探究活動 B）を行った。2 年次後半期から 3 年次にかけては、個人の興味や関心に基づくテーマを設定し、そのテーマに基づく調査・探究活動とその成果発表を行った（卒業研究）。

この取り組みをベースにして、令和 4 年度からは北海道教育大学函館校との連携を踏まえた「地域課題解決型探究学習」を行っている。昨年度までで 1～3 年生の 3 年間のサイクルが一度終えたところではあるが、その中で「生徒が発見する問題およびそこから設定する課題のあいまいさ」について指導・伴走を行った教員の中からあがってきた。

そこで今年度は各学年間の探究や、学校—大学間をつなぐ「探究連携担当」と、実際の各学年の探究を中心となって進める「学年探究担当」を研究部に配属した。また、「探究連携担当」は、各学年度活動全体を踏まえた活動計画を作成し（図 6）見ながら、実際に各学年の探究の時間、例えば探究の時間のまとまりのオリエンテーションの時間や、問題が発見する場面や発見するための取り組み、具体的な課題を設定する場面などに参画することができる体制を構築した。この校内体制によって、これまで以上に 3 年間のつながりや各活動の見通しをもった探究の時間の運営を行うことが期待できる。

図6 令和7年度「総合的な学習の時間」全学年活動計画（一部）

| 令和7年度「総合的な学習の時間」全学年活動計画 | | | | | | | | | | | | | |
|---|--|----------------------|------|----|-----|---------------|--|----|------|----|-----|---------------|-----------------|
| 1学年 Hop～ | | 2学年 グループ探究活動B ～Step～ | | | | | 3学年 卒業研究 | | | | | | |
| 探究の「基礎」を学ぶ | | 探究ステージ | | | | | 探究ステージ | | | | | | |
| ・地域とつながる | | 自分と地域をつなげる | | | | | 自分 | | | | | | |
| 『まちの宝』を見つけよう | | 地域の課題を発見する | | | | | 地域や社 | | | | | | |
| | | 探究課題 | | | | | 『より良い未来』のた | | | | | | |
| 内容 | | 時 | 計画日付 | 曜日 | 時間割 | 探究ステップ | 内容 | 時 | 計画日付 | 曜日 | 時間割 | 探究ステップ | 内容 |
| me) ルールの確認・アカウント使用とパスワードの理 の使い方 | | 1 | 4/30 | 水 | ① | オリエンテーシ オン | オリエンテーション（主催者説明・2学年「探究」の目的と目標・1年 間の流れ） | 1 | 4/7 | 月 | ② | 情報収集 | 卒業研究実地 |
| me) メールの使い方（Ecoice署名/データの添付リン ク） | | 2 | 5/1 | 木 | ④ | 課題設定 | 「函館市の未来を考えよう！」課題設定に向けて①～問題発見～ | 2 | 4/7 | 月 | ③ | 情報収集 | 卒業研究実地 |
| me) ドキュメント・スプレッドシート・スライドの使 の活用作成 | | 3 | 5/7 | 水 | ① | 課題設定 | 「函館市の未来を考えよう！」課題設定に向けて②～問題発見～ | 3 | 4/7 | 月 | ④ | 情報収集 | 卒業研究実地 |
| me) ブックマーク・ショートカット・クラスルーム課 外コマンド・ブックマークフォルダの作り方（タ ブレット） | | 4 | 5/9 | 金 | ④ | 課題設定 | 「函館市の未来を考えよう！」課題設定①～グループワークに向けた意識 調査～ | 4 | 4/8 | 火 | ① | 情報収集 | 卒業研究実地 |
| 探究（主催者説明・探究って何？・1年間の流れ） | | 5 | 5/22 | 木 | ⑤ | 課題設定 | 「函館市の未来を考えよう！」探究懇話会（外部講師による講演+懇話 会）※市役所 | 5 | 4/8 | 火 | ② | 情報収集 | 卒業研究実地 |
| 調べてどんなまち？～まちについて知る～ | | 6 | 5/22 | 木 | ⑥ | 課題設定 | 「函館市の未来を考えよう！」課題設定②～グループワーク合わせ+課題・ テーマ決め～ | 6 | 4/8 | 火 | ③ | 情報収集 | 卒業研究実地 |
| 調べてどんなこと？教育大函館校1日体験・学内見学 | | 7 | 5/29 | 木 | ⑤ | 課題設定 | 「函館市の未来を考えよう！」課題・テーマ決め+調査計画①（追南 FWと宿泊研修調査も含まれて） | 7 | 4/8 | 火 | ④ | 情報収集 | 卒業研究実地 |
| 調べてどんなこと？教育大函館校1日体験・まちの宝に | | 8 | 5/29 | 木 | ⑥ | 課題設定 | 「函館市の未来を考えよう！」課題・テーマ決め+調査計画②（追南 FWと宿泊研修調査も含まれて） | 8 | 4/8 | 火 | ⑤ | 情報収集 | 卒業研究実地 |
| 調べてどんなこと？教育大函館校1日体験・課題の選定 | | 9 | 6/3 | 火 | ⑤ | 情報収集 | 「函館市の未来を考えよう！」課題・テーマ決め+調査計画③（追南 FWと宿泊研修調査も含まれて） | 9 | 4/8 | 火 | ⑥ | 情報収集 | 卒業研究実地 |
| 調べてどんなこと？教育大函館校1日体験・調査の方法 | | 10 | 6/3 | 火 | ⑥ | 情報収集 | 「函館市の未来を考えよう！」課題・テーマ決め+調査計画④（追南 FWと宿泊研修調査も含まれて） | 10 | 4/9 | 水 | ① | 情報収集 | 卒業研究実地 |
| 調べてどんなこと？教育大函館校1日体験・大学生との | | 11 | 6/10 | 火 | ⑤ | 情報収集 | 「函館市の未来を考えよう！」FW先アポイント・調査活動準備① | 11 | 4/9 | 水 | ② | 情報収集 | 卒業研究実地 |
| 調べてどんなこと？教育大函館校1日体験・振り返り | | 12 | 6/10 | 火 | ⑥ | 情報収集 | 「函館市の未来を考えよう！」FW先アポイント・調査活動準備② | 12 | 4/9 | 水 | ③ | 情報収集 | 卒業研究実地 |
| ①情報収集ワークショップ | | 13 | 6/16 | 月 | ⑥ | 情報収集 | 「函館市の未来を考えよう！」FW先アポイント・調査活動準備③ | 13 | 4/9 | 水 | ④ | 情報収集 | 卒業研究実地 |
| ②情報収集ワークショップ | | 14 | 6/17 | 火 | ⑥ | 情報収集 | 「函館市の未来を考えよう！」FW先アポイント・調査活動準備④ | 14 | 4/9 | 水 | ⑤ | 情報収集 | 卒業研究実地 |
| ③「宝」は何だろう？（オリエンテーション・課題意識 | | 16 | 6/26 | 木 | ⑥ | 情報収集 | 「函館市の未来を考えよう！」FW先アポイント・調査活動準備⑤ | 15 | 4/14 | 月 | ① | 情報収集 | 卒業研究実地 団式着ぐる |
| の参加～先輩の探究から問いを見つけよう！～ | | 19 | 7/8 | 火 | ⑥ | 情報収集 | 「函館市の未来を考えよう！」FW先アポイント・調査活動準備⑥ | 16 | 4/17 | 木 | ③ | オリエンテーシ オン | オリエンテー ション |
| の参加～先輩の探究から問いを見つけよう！～ | | 20 | 7/16 | 水 | ① | 情報収集 | 「函館市の未来を考えよう！」FW先アポイント・調査活動準備⑦ | 17 | 4/17 | 木 | ④ | 課題設定 | 卒業研究（結 束） |

(3) 具体的な実践（各教科における取り組み）

問題発見・解決能力の育成を図るための各教科の取組の具体については、各教科の研究紀要をご覧ください。

ただし、各教科の実践には、以下に示す令和4年度～令和6年度の実践が土台となっている。これら
の手段を活用しながら、問題発見・解決能力を育成し、ひいては主体的・対話的で深い学びの実現に迫
っていくものとする。

- ① 自らの学習を調整するための、生徒による学習履歴の蓄積
- ② 生徒が自らの学習状況を把握するためのフィードバック
 - i) CBT等の活用
 - ii) GoogleClassroomの採点及びブルーリックの活用
 - iii) 教員による口頭またはコメント機能を用いたフィードバック
- ③ 学習順序、学習課題、学習方法、学習形態などにおける、生徒の自己選択・自己決定
※特に「学習課題」については、今年度主題においてその設定に重きを置く。

IV 成果と課題（中間報告）

本年度のここまでの研究実践を通じて、次のような成果と課題が確認された。

○各教科における学習活動の位置付けの明確化

授業導入における「問い」を生成する活動を通して、生徒が既習事項と新しい学習内容とのつながりを意識し、自らの学習の進め方を主体的に捉え直す姿が見られた。これにより、学習の見通しをもって授業に臨む姿勢や、知識を関連付けて活用しようとする態度が徐々に育成されてきていることが確認できた。

○学習や生活を調整する力の育成

SR フォームや DSST、学習履歴サイトなど校内の共通ツールを活用し、各教科での取り組みと関連付けることで、生徒が「振り返り」と「見通し」を意識的に行き、自ら学習や生活を調整しようとする力が育ち始めていることが確認できた。具体的には、計画の立案や修正、目標に応じた学習方法の工夫など、自ら学習を調整しようとする学びにつながる実践が徐々に定着しつつある。

○自ら問いを発し、探究を進める態度の育成

「問題発見・解決能力」を共通の資質・能力として位置付けたことにより、生徒は各教科で培った力を、総合的な学習の時間や学校生活全般に広げるようになった。授業での疑問をきっかけに地域課題を調べたり、健康的な生活習慣を考案したりするなど、教科で培った力を日常生活に活かそうとする姿が見られ、学びを社会や生活と関連付けて探究を深めようとする態度が育ちつつある。

●生徒が見出す「問い」の質の差

学習内容に直結する問いと、関心先行型で学習目標から逸れがちな問いが混在しており、問いを学びに位置付けるための指導の工夫が求められた。特に、単なる知識確認にとどまる問いから、学びを深めたり社会的課題につなげたりできる問いへと発展させる支援が必要であることが明らかになった。

●課題設定に至る過程での教師の関わり方

生徒の主体性を尊重しつつも、探究を深めるためにどの段階でどのように支援するか、教師の関わり方が課題として残った。指導の介入が早すぎると主体性が損なわれ、遅すぎると探究が停滞するため、支援のタイミングや方法を精査する必要がある。

●形成的評価の具体化

「問題発見・解決能力」を構成する資質・能力を授業のどの場面で、どのように捉えるかが教科間で揺らいでいた。評価の視点や方法をさらに精緻化し、教科を越えて共有できる枠組みを整えることが今後の課題である。特に、ルーブリックや振り返り記述を活用した評価を通じて、学習過程の可視化を図る必要がある。

この中間報告をもとに、各教科等においてさらなる改善を図り、本校設定の研究課題の検証を進めていきたい。

V おわりに

本研究は、「問題発見・解決能力の育成を目指した教育課程の編成」を主題に掲げ、生徒が「つながる、深まる問い」を生み出しながら学習を進める姿を目指して取り組んできた。これまでの実践から、問題発見・解決能力の育成は一つの教科や場面に閉じた営みではなく、学校全体の教育課程を通じて連続的に支えられるべきものであることが明らかとなった。また、自ら学習を調整する取組や協働的な学びとの関連を意識することで、生徒が主体的に学びを構築し、他者と学びを共有しながら課題解決に取り組む姿が徐々に見え始めている。

今後は、生徒が自ら発した「問い」をいかに学習の核として深め、社会や地域とつながる学びへと広げていくかが課題となる。そのためには、教師の発問技術やカリキュラム・マネジメントの工夫、形成的評価を通じたフィードバックの充実が不可欠である。次期学習指導要領の改訂を見据えるとき、学校教育全体の中で「問題発見・解決能力」をどのように位置付けるかは重要な論点であり、本研究の成果と課題もまた、今後の議論や実践に寄与するものである。

(文責 山下 尚也)

<引用文献>

- 1) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説 総則編』2018年 38頁
- 2) 文部科学省『中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会（第8回）配付資料【資料1-1】論点資料⑦質の高い探究的な学びの実現（情報活用能力との一体的な充実）』2025年5月32頁
- 3) 文部科学省『中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会（第8回）配付資料【資料1-1】論点資料⑦質の高い探究的な学びの実現（情報活用能力との一体的な充実）』2025年5月33頁
- 4) 文部科学省『「令和の日本型学校教育」の構築を目指して～すべての子供たちの可能性を引き出す、個別最適な学びと協働的な学びの実現～』2021年15頁
- 5) 杉本任士／小林真二 編著 奥平理／古地順一郎／北海道教育大学附属函館中学校 著『ワークブック 地域課題解決型探究学習&ICTの基礎基本 地域創生・活性化をめざして』2023年3月3頁
- 6) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成二十九年告示）』2018年20頁
- 7) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成二十九年告示）』2018年21頁
- 8) 文部科学省『中学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説 総則編』2018年38頁
- 9) 石黒康夫／星雄一郎 著『自立心を育む！生徒が変わる 中学生のソーシャルスキル指導法』ナツメ社 2018年10月11頁

<参考文献>

- ・文部科学省『中学校学習指導要領（平成二十九年告示）解説 総則編』2018年
- ・文部科学省『中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会教育課程企画特別部会（第8回）配付

資料【資料1－1】論点資料⑦質の高い探究的な学びの実現（情報活用能力との一体的な充実）』

2025年

- ・東京都多摩教育事務所『東京都多摩地区教育推進委員会第29次計画（通算第50年次）報告書 問題発見・解決能力の育成 ～各教科等の学び方のプロセスの具体化～』2024年
- ・安齋勇樹／塩瀬隆之 著『問いのデザイン 創造的対話のファシリテーション』学芸出版社 2020年
- ・井澤友郭 著『「問う力」が最強の思考ツールである』フォレスト出版 2020年
- ・高橋純 著『学び続ける力と問題解決 シンキング・レンズ, シンキング・サイクル, そして探究へ』東洋館出版 2022年
- ・木村明憲 著『自己調整方略 主体的な学びを実現する46の手立て』明治図書 2024年
- ・宗實直樹 著『「発問」のデザイン 子供の主体性を育む発想と技術』明治図書 2024年
- ・奈須正裕／伏木久始 編著『「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実を目指して』北大路出版 2023年
- ・北俊夫 著『「ものの見方・考え方」とは何か 授業力向上の処方箋』ぶんけい 2018年
- ・樺山敏郎 著『個別最適な学び・協働的な学びを実現する「学びの文脈」 学級・授業・学校づくりの実践プラン』明治図書 2022年
- ・樺山敏郎 著『個別最適な学び・協働的な学びを実現する「学びの文脈」2 ラーニング・マウンテンを活用した授業づくりの実践プラン』明治図書 2024年
- ・北海道教育大学附属函館中学校『平成24年度 研究紀要』2012年
- ・北海道教育大学附属函館中学校『平成25年度 研究紀要』2013年
- ・北海道教育大学附属函館中学校『平成29年度 研究紀要』2017年
- ・北海道教育大学附属函館中学校『令和4年度 研究紀要』2022年
- ・北海道教育大学附属函館中学校『令和5年度 研究紀要』2023年
- ・北海道教育大学附属函館中学校『令和6年度 研究紀要』2024年
- ・杉本任士／小林真二 編著 奥平理／古地順一郎／北海道教育大学附属函館中学校 著『ワークブック 地域課題解決型探究学習&ICTの基礎基本 地域創生・活性化をめざして』2023年